

小宮豊隆と個人文庫

——柴田治三郎文書にみる図書館との関わり——

曾根原 理

はじめに

小宮豊隆（一八八四～一九六六）は、大正・昭和期に活動した知識人であり、夏目漱石の愛弟子として『漱石全集』編集の中心となったことも良く知られている。さらに小宮は、東北帝国大学法文学部の教員としても活動し、ドイツ文学講座を主宰する一方、昭和十五年（一九四〇）から同二十一年まで附属図書館第五代館長となり、漱石文庫の受入などに尽力した。¹⁾

小宮の後任としてドイツ文学講座を主宰した柴田治三郎（一九〇九～一九八）は、長年にわたり小宮夫妻との交流があった。柴田が夫妻から受け取った書簡には、従来

知られていなかった小宮の図書館に関する活動が記されている。²⁾ 今回、主に三つの活動に注目することで、その方面の事実関係を明らかにしていきたい。一つは、北海道帝国大学予科のドイツ語教員であった東新（ひがしあらた）の死後、彼の蔵書を受け入れた経緯である。そこには敗戦前後の、外国書は個人の蔵書を手する以外の方法が乏しかった状況が示されている。二番目は小宮と漱石の関係、三番目は、小宮の死後蔵書が遺族から東北大学に寄贈された経緯について、今回の調査により得られた知見を紹介する。

以上三つの例を通じ、戦中・戦後の時代に書籍の入手が困難だった様子や、その中で個人文庫等が形成されていく事情を跡づけたい。その正確な経緯を把握すること

で、当時の文化的状況や人間関係などを確定していく一助にしたいと考えている。

一 東新旧蔵書の受け入れ

小宮が図書館長の時期、柴田は北海道帝国大学予科教授として札幌にいた。当時、小宮から柴田に送られた手紙によって、小宮館長の仕事ぶりが多少窺える。

【資料一】昭和一六年三月三日付葉書（1—12）

（前略）風邪はまあなほった。国文と思想史との卒業論文を合計三つひきうけ、今日から読み始めた。講義はもう済んだが、図書館には月水金の午後出勤。是は年度末だもので、印ばかり捺してゐる。原稿を書かなくてはならない。東京からの客がある。年をとってエネルギーは不足。新体制で、うまいものは喰へない。それでも天地は春めいて来たから少少ありがたい。

昭和十六年三月当時は、図書館には週三日、「月水金の午後」に出勤していたらしい。また、図書館のために人材を探していた様子や³⁾、資料二のように、重複図書を整

理を試みていたらしい様子なども窺える。ちなみにブルダツハ (Konrad Burdach 1839-1936) は、ドイツの言語・文学研究者である。

【資料二】昭和一七年八月二十一日付葉書（1—24）

この間は失敬。その節話した重複図書目録別封書留で送る。用が済んだら返送してくれ玉へ。ブルダツハはこの中には這入つてゐないやうだ。のみならず文学関係のものは殆んど這入つてゐない。是は少しをかしいと思ふが、今調べるのも手数だから、このまま送る。ほしいものがあつたら、別に書き抜いてよこし玉へ。（後略）

北大予科で柴田の同僚であつた東新（一八八三—一九四四）が逝去したのも、小宮が図書館長だつた時期であつた。東は、東京帝国大学文学部において小宮の後輩であり、漱石の周辺で古くから交流があつた。⁴⁾ 小宮は、門下生の世話を頼んだこともあつた。

【資料三】昭和一六年三月二十五日付封書（1—13）

（前略）ゆうべ東に津村を紹介した。東は好感をもつたらしく見える。東によく刺激と鞭撻とを頼んで置いた。柴田が直接に、君が間接に指導してく

れば、相当役に立つ事と思ふが、何分まだ子供だからとも言つて置いた（後略）。

「津村」は、後に東北大学教授となる津村浩三（一九一四〜二〇〇九）。この時点では、小宮の指導をうけ東北帝国大学を卒業した後、新任の北大予科教員となつていた。大学でも職場でも先輩でもあつた柴田は、小宮からたびたび様子を案じる手紙をうけとつている。資料三で小宮は、津村を東に紹介した様子を知らせ、札幌での教導を依頼している。

その三年後、三月十九日の東の死に対し、小宮は以下のような手紙を送っている。

【資料四】昭和一九年四月五日付封書（1—37）

（前略）札幌はさぞさわさわしてゐる事と思ふ。仙台も日一日とざわつきやうがひどくなる。僕は生きてゐるのもいやになりつつある。東はどんな気持で死んだか分からないが、東を羨ましいとまでは思はないまでも、この先きかういふ生活が続く事を考へると、息もつけない気がする。（後略）

（追伸）東の蔵書を予科で買ってやったらどうだろう。いくらもないかも知れないが。

小宮は、戦時体制下の生活を「生きてゐるのもいやになる」と嘆き、東の死について「羨ましいとまでは思わないまでも」と思わず愚痴つてゐる。それはそれとして、追伸部分に見られるように、この頃東旧蔵書の譲渡先が検討され始めた。当初は、本人の勤務先だった北大予科が、第一候補として検討されている。

【資料五】〔同年〕六月一七日付封書（1—38）

（前略）東の蔵書に就いては御骨折の段ありがたう。晃からの手紙によると遺族の方でも引とつてもらふ気になり、晃自身で蔵書のリストをつくつてゐるとあつた。

それで、他方面から運動した方がよからうと思ひ、上原図書館長に、もし予科の方から右蔵書購入の希望が出たら、なるべく便宜を計つてやつてくれと頼んでやつたら、あまり大きなものは買ひかねるが、一体価格はどの位の見当か、リストが出来てゐるならリストを見たいと言つて来た。右御含みの上然るべく御取計ひが願ひたい。

上原君の手紙に、理学部に晃があるといふ事だから、会つて話をきいて見ようとあつたが、晃は中谷君に

くつついて、根室に霧の研究に行くやうな事を言つてゐたから、或はもう出かけたあとではなかつたかと思ふ。もつとも上原君は、十五日著京、二三日滞在と書いてゐるから、旅行から帰つて、晃に会ふつもりかも知れない。さうすれば多分ますます晃に会ふプロバビリティは少くなるわけである。

上原君には、東の蔵書は哲学・宗教の類が多い筈だから、そちらの大学には向かないが、然し予科の先生方にはさういふものを要求してゐる人が相当ゐる筈だから、利用は十分されるに違ひないといふ意味の事と、目下外国書はかういふ方法でなければ手に入らないから、仙台でも出来るだけ箇人のライブラリーを買ふ事にしてゐる旨を書き添えて置いた。

君でも山岡君でも、もしくは服部君でも、上原君に会つて話をしてくれると思ふ。

「晃」は、東新の子息の東晃（一九二二〜二〇〇〇）を指す（後に北海道大学教授）。彼は当時、北海道帝国大学理学部に在籍し、寺田寅彦の門下生で低温科学の世界的権威であつた中谷宇吉郎（一九〇〇〜一九六二）教授に師事していた。東晃がリストを作成し、小宮が仙台か

ら北大予科の図書館長を務めていた上原轍三郎（一八八三〜一九七二）に働きかけ、現地でも柴田が援護するという形が構想されていたようだ。山岡直道はドイツ語、服部品吉は国語・漢文を専門とする予科教員で、服部は昭和一五年一月から同二〇年十一月まで予科長を務めていた。⁵⁾

ところで、ここには東の蔵書内容についても窺える記述が存在する。小宮は、「東の蔵書は哲学・宗教の類が多い筈」という。ドイツ語の教員ではあつたが、大学時代は宗教学を専攻しており、その本領は語学・文学以外であつたことが想像される。また、小宮の言葉として「目下外国書は、こういう方法でなければ手に入らない」云々が記されている。当時の時代状況と、その中で小宮が果たした役割を考えると、こうした認識があつたことは意義深く思われる。

約二ヶ月後、東晃が札幌に戻り、蔵書の整理が進められたと思われる。

【資料六】同年八月六日付封書（1—40）
（前略）ゆうべ晃の友人で、東の弟子の中村とかいふ理学部の学生が来た。晃は根室から三日に帰つて

来るらしい。帰つて来たら晁をよんで、蔵書の件に就き談合して見てくれ玉へ。(後略)

ところが、経済的理由から、北大予科への納入は要検討となつたようである。

【資料七】同年十一月十六日付葉書(1-43)

(前略) 昨日大学構内で偶然服部君に会つたら、東の本は高いので、金を出してもらふのが困難なやうな事を言つてゐた。この二十一、二十二日に東京で図書館会議がある事になつてゐて、多分上原館長に会ふだらうから、僕から館長によく頼んで置くと置いて置いた。七百冊で五千円といふのは、誰がつけた値段か。もし東の方の希望なら、希望は希望として、丸善の評価に従はせるがいいし、丸善の評価なら、それが時価なんだから、黙つて払ふがいいのではないかと思ふ。万一大学で買はないやうなら、一高に話をする。インド関係のものは僕が買ふ事にして悪くはない。送る場合、箱の都合などつくかしら。

東新旧蔵書について、「七百冊で五千円」という値段がつけられた。北大予科図書館長の上原教授は「高いので

：困難」といつているという。小宮は、もし丸善がつけた値段なら、専門の古書店なので適正価格であろうとい、様子によつては第一高等学校に譲渡する可能性も考へている。当時一高校長は、小宮の盟友ともいえる安倍能成(一八八三〜一九六六)が務めていた。しかし結局、小宮が館長を務める東北帝国大学附属図書館で引き取る事になつたらしい。

【資料八】(昭和二〇年)五月二十二日付封書(1-46)

御手紙拝見。東の本のリストも受取つた。今日早速金倉君に見せて、およその値ぶみをしてもらつた所、金倉君にもよくは分からないが、およそ参千五百円くらゐの見当(こまかに當つて行けば、もつともなるかも知れないが、およその見当で)だらうといふ事だつた。それで手放す気があるなら、すぐ箱詰にして、東北帝大図書館宛に送るやう、手筈をしてくれ玉へ。一一本の名前をかいいて、値段をかいいて、売買の契約書をとりかはした上でないと金が出ないので、御役所との取引には相当の時日を要するが、是は僕の方で出来るだけ早く始末するように骨を折るつもりである。然し右から左といふわけには行か

ないから、この点東の細君によく諒承させて置いてくれ玉へ。金倉君の話だと、リストの初めの二部、殊に最初のものが一番いいもので、まづ千円と値ぶみしてもいいものだらういふ事だった。屑も大分あるらしい。(後略)

小宮は、同僚の教授でインド哲学専攻(後に学士院賞をうける)の金倉円照(二八九六〜一九八七)に相談し、東新旧蔵書は金額にして三千五百円程度と見積もった上で、東北帝国大学で引き取ることを柴田に連絡している。

その後の経緯については分からない。しかし現在、東北大附属図書館に、東晃納入の洋書が全七十三冊あることが確認できる。⁶⁾ただし、合計金額は二千円に満たないし、値段の高い二点⁷⁾をあわせた金額も五百円未満と記録されており、資料七の内容と相違することから、東新旧蔵書がすべて東北帝国大学に納入されたか否か、さらに調査が必要である。

二 漱石に関する記事

小宮豊隆による図書館長時代の業績として良く知られ

ているのは、昭和十九年に漱石旧蔵書を受け入れたことである。⁸⁾岩波版『漱石全集』作成の中心人物で遺族からの信頼も厚かったことにより、夏目漱石の旧蔵書や身辺資料が、ほぼ丸ごと仙台の地に運ばれた。柴田文書の中には、岩波書店や漱石遺族との関係を示す資料も含まれている。

【資料九】昭和一五年四月十六日付葉書(1-4)
(前略) 長田から漱石全集十九巻のうち、第二(坊ちゃん外七)、第四(虞美人草、坑夫)、第七(行人)、第十五(日記及断片)の四巻はないが、あと十五巻はどうやら揃ふと言つて来た。それでもよければ、いつでも送つてくれる筈になつてゐる。但函にいくらか埃のついてゐるのがあるさうだ。

長田幹雄は、岩波書店社員。小宮の指導のもとで、漱石全集制作に尽力していた。資料八は、柴田が漱石全集入手を打診したことに對する返事かと思われる。また、次の資料一〇からは、漱石夫人(夏目鏡子 一八七七〜一九六三)との親しい交流が読み取れる。

【資料一〇】昭和一八年十月二十一日付葉書(1-32)
青森から大きな箱に林檎をつめて送つて来た。早速

蓋をあけて食べて見たが、なかなかうまい林檎である。御芳志ありがたう。近いうち夏目の奥さんが来るやうな事を言つてゐた。来たらずし東京へ持つて行つてもらはうと思ふ。かういふものは何所ででも喜ばれる。殊に東京の人は一しほ喜ぶに違ひない。

青森の方には君から宜敷言つてくれ玉へ。(後略)

一方、小宮の教育・研究活動が漱石の作品に及んでいたことも窺える。

【資料一】 同年六月十五日付葉書(1—27)

(前略) 予科で漱石の表現力、大学で漱石の構成力といふのをやる予定だが、それまでにうまく纏まるかどうか、その方が反つて心配だが、是はどうにかごまかせるだらう。

【資料二】 (同年) 十一月十一日付葉書(1—34)

(前略) 昨夜の水曜会では、是も近いうちに帰る筈の男が小説の朗読をした。二十四日には漱石研究会で「三四郎」をやると言つてゐる。僕はすべてをアプシードスーペーに臨む気持で眺めてゐる。諸行無常の感に堪えない。(後略)

小宮はドイツ文学の講座に所属していたが、資料一

に見えるように、集中講義の際には漱石について語ることもあつたようだ。また資料一二のように、漱石の木曜会にならない、仙台で「水曜会」を開いて学生たちとの交流の場としていた。昭和十八年は、文科系学生の学徒動員が始まつた年で、「帰る筈」の理由は徴兵検査のためと推測できる。そうであるからこそ、小宮は「アプシードスーペー(最後の晩餐)に臨む気持」すなわち「諸行無常の感」に襲われたのだと思われる。⁹⁾

昭和二十年には、いよいよ戦争が激しくなり、図書館長として貴重書の疎開を考える必要が出てきた。既に一月段階で、検討を開始していることが確認されているが、⁽¹⁰⁾六月の柴田宛書簡にも、具体的な行動が記されていた。

【資料三】 (昭和二〇年) 六月十五日付葉書(1—47)

(前略) 図書疎開の用務で方方駆けずり廻つてゐる。明日は秋田・大曲・横手とあるく旅に出る。主として漱石文庫の預ヶ先を探す為である。早稲田の先生の書齋はどうも焼けたらしい。

東京都新宿区早稲田南町七番地の漱石山房(明治四十年九月二十九日から逝去する大正五年十二月九日まで漱石が住んでいた住居)は、この年の五月二十五日の空襲

で全焼した。結果的に漱石蔵書は、仙台に移転したことで辛うじて焼失を免れたといえる。

戦後、小宮は東京に移住するが、漱石文庫について忘れるわけにはいかなかった。世間も落ち着いてきた頃、整理のため仙台に赴くこともあったようである。

【資料一四】昭和三〇年四月十七日付葉書（1—64）

身のまわりがあんまりとりちらかされてゐるので、少少片づけてゐるうちに、東北ドイツ文学会の通知があり、返事を出したかどうか忘れてしまったので、ちよつとこれを書く。五月二十一日の会に僕は出られない。何かの機会に仙台へ行き、漱石文庫の未整理を片づける気であるが、今度はこつちでいろいろな用があるので、一石二鳥を企てるわけに行かなくなつた。（後略）

その一方、柴田が小宮の仲介で、漱石全集と関わる出来事もあった。

【資料一五】〔昭和三二年〕一月十七日付封書（1—68）

妙なことで君を煩はしたいことができた。

漱石全集をこんど、現在の志賀直哉だの芥川龍之介だのの全集の形、言はば新書型で岩波から出すこと

になったに就き、僕に解説のことを考へてくれと言はれた。解説はその新書型で十頁くらゐにしたいのださうだ。僕はすでに昔の決定版に相当長い解説をかいてゐる。それをそのまま使ふのだつたらいいが、それでは向うの注文にはまらない。十頁程度のものを書くとするれば、三十何巻になり、一ヶ月二冊づつ出して一年半近くかかる予定だといふのだから、とてもからだが続かないだらうといふ気がする。

就いては、もしくは君にひまがつくれ、書く興味があるのなら、君が僕に代つて書いてくれるわけに行かないか。無論僕の解説を土台にして、フェルキェルツェンしてくれてもいい。もしくは君には君の立場があるのだから、僕の解説に貪著せずに、君の思ふところを書いてくれてもいい。

ともかく君に引受けてもらへるとすれば、具体的なことはゆつくり話し合ふことにする。どうか君の都合をきかせてくれ玉へ。

岩波ではできればこの四月ごろから出したいと言つてゐる。

今度の全集には、今の大学生がよんでもちよつと分

かりかねるやうな言葉に簡潔な注釈をつけようといふことになってゐる。

この注釈の数をふやし、注釈そのものもできるだけ精しく且つ学問的にして、漱石全集が出てしまふころに、漱石辞典を出させる筈である。

漱石全集は、時代とともに変化している。内容的には、昭和十年の「決定版」がその後の基準となつた。それに対し昭和三十一年に、「決定版」を基礎としながらも、新書版で注解と解説を備え、より親しみやすく入手しやすいもの（漱石全集として初めて自由分売を行った）が構想された⁽¹¹⁾。最終的に小宮が解説を執筆したのだが、資料一五によると、柴田が独自執筆ないし小宮の「決定版」所収解説文を柴田が「フェルキユルツェン」（独Verkurzen 縮める）する案があつた。しかし、それはいつたん進行したものの、柴田の体調悪化により幻に終わったことが、以下の資料一六〜一八によつて分かる。

【資料一六】同年一月二十六日付葉書（1—69）

早速御返事ありがたう。少し工合が悪くて、二十四日五日と寝てゐたので、返事がおくれたが、岩波書店の長田幹雄にはすぐ連絡させたので、そのうち具

体的な打ち合せが行くことと思ふ。どうか宜敷頼む。お蔭で僕は助かった。必要があつたら、いつでも相談してよこし玉へ。長いことかかる仕事だから、時間表でもつくつて、一日何時間かづつこれにコンスタントにつかへるやうにしないと、無理をしてからだを害するおそれがある。（後略）

【資料一七】同年二月六日付葉書（1—70）

お手紙拝見。血圧が高くなつたさうで、どうか大事にし玉へ。上京するには及ばない。僕の解説を読んだ見ただで、君流に二十枚の解説をかいてくれればいい。ただこの間長田が来て、僕の名前と君の名前とを解説者の名前として掲げたい。その方が営業的に有利だからと言つた。それで君が承知するならば、さうしてもいいと僕は言つた。もしさうするならば、君の書いた解説を僕が一度眼を通して、岩波にとどけることにすれば、君も或は余計な気をつかはすにすむかも知れない。如何。（後略）

【資料一八】同年二月十六日付葉書（1—71）

御手紙拝見。からだの工合がわるくなつたので、解説を続けてかくことに自信が持てなくなつた由。残

念だが、無理をさせてとんでもない結果にでもなつては大変だから、あきらめることにする。もつとも長田と相談の上、もう暫く様子を見る余裕がありさうなら、様子を見ることにしてもいい。まあともかくこつちでどうにかするから、一往手を切ってくれ玉へ。(後略)

岩波書店の長田幹雄と小宮の間で、二月初旬までは柴田が解説を書くことで合意していた。しかしその後、柴田の体調が崩れたことから、結局二月中旬には柴田執筆の可能性は無くなった。⁽¹²⁾

なお、資料一五に記されていた「漱石辞典」であるが、規模の点などで意見がまとまらなかつたらしく、ずっと後になって用語・人名に限定する形で、古川久編『夏目漱石辞典』(東京堂、一九八二年)が出されている。古川久(一九〇九〜一九九四)⁽¹³⁾は小宮の助手として、昭和一〇年版漱石全集の総索引編集に加わっており、昭和三十一年版以降は注解の作成にもあたっていた。

柴田は、小宮が東京に移るのと入れ替わりに、東北大学の教員(ドイツ文学専攻)となり仙台に転居していた。そのため、漱石文庫について依頼をうけることもあった。

【資料一九】昭和三十三年九月一日付葉書(1―77)

(前略) 妙な頼みがある。漱石文庫の中のダナンツイオの「フレーム・オブ・ライフ」をあけて見て、それに漱石の読んだ痕跡があるかどうか調べて見てくれ玉はぬか。但どつか工合が悪くて、外出しないでゐるやうだったら、よくなつてからでいい。(後略)

【資料二〇】同年九月七日付葉書(1―78)

ハガキありがたう。ダナンツイオの「フレーム・オブ・ライフ」がアンカットのままで読まれた形跡が全然ないことが確かめられて、僕の想像した通りだったので、安心した。ありがたう。(後略)

東北大学附属図書館の漱石文庫の一書について、事情は未詳ながら調査の必要があつたらしく、⁽¹⁴⁾小宮から柴田に問い合わせがあり、回答を得たことがあつたようだ。

柴田文書にはその他、小宮豊隆の死後の出来事として、恒子夫人(以下「夫人」と記す)が漱石展に関係資料を貸し出したこと(昭和五〇年十二月二十八日付葉書、同じく夫人が漱石について書くよう勧められていたこと(昭和五三年二月十三日付葉書)など、漱石をめぐる史料も存在する。

三 小宮文庫の成立

昭和四十一年五月三日、小宮豊隆は八十二歳で逝去した。今度は、彼の蔵書の行方が問題となった。柴田は夫人からの信頼厚く、しばしば相談相手となっている。

【資料二二】夫人昭和四十一年五月三十日付葉書(2-18)

昨日四七日の法要を営み少し落付いた心を取戻しました。金吾当ての御手紙拝し上げ、金谷先生の御厚情承りました。私といたしましては、主人の終生に渡り集めましたもの此まゝいつまでも保存いたし度くとは存じますが、完全な書庫でもない此室では火災の不安もございますので、管理者である曠三に早速ベルリンまで相談の手紙を出しました。十月に曠三が帰りまして相談の上、お願いするをいたしましたら、ぜひ東北大学にいたします。二十三日にベルリンに入り、今日のハガキではエツカルトさんとお話したと書いてあり、目下の処曠三からのたよりが唯一の慰めでございます。柏木純一夫人のおすゝめで南多摩霊園の柏木家のとなりの墓地を求めまし

た。七月始めまでに埋骨が出来さうです。

小宮豊隆には成長した子女が八名いた。上三名が男子(順番に書之助、金吾、曠三)、下五名が女子(三千代、末子、里子、昭子、夏子)である。男子三名のうち、ドイツ文学の研究者となったためか、蔵書については三男の曠三が「管理者」とされたらしい。ただし、豊隆逝去時、曠三はドイツにいた。そのため、文学部教授(中国哲学専攻)で当時の東北大学附属図書館長であった金谷治(一九二〇〜二〇〇六)から、次男の金吾あてに手紙が出されたようだ。資料二一で見ると、夫人は蔵書保存のためにも、東北大学に納入することを検討していたらしい。ついにながら、柏木純一は仙台を拠点とする十七銀行十三代頭取で、小宮豊隆の後輩として豊津中学以来の交友関係にあつた。⁵⁾

十月になると、三男の曠三が帰国し、蔵書についての相談が始まった。

【資料二二】夫人同年十月三十一日付葉書(2-19)

秋冷の頃御障りもなく渡らせられますか。曠三もやと帰って参りました。小宮家の相続を曠三に任せ度くと存じ、ドイツの本の事も帰りをまつて居りま

したが、此家を買いました（二十四年）当初から土地の事すべて金吾が手伝って私と二人で登記の事もいたしましたので一応僕は辞退すると申て、書籍の方も夏以来金吾が作って参りました目録を去る二十六日、金谷・北住両教授にも御目にかきました。水曜日に御上京の節手許に置いた方が都合のよい本だけは曠三に残してやりたいと、一とほり御覧頂き度いと存じます。まだ曠三も一人旅の疲れがぬけきらず養生いたして居ります。何卒よろしく御願申上げます。

次男の金吾が、夏以来父の蔵書の目録を作成していたらしい。それを金谷および北住敏夫（一九一二〜一九八八）に見せたとある。北住は、昭和二十四年以降は東北大学教授（国文学専攻）であるが、小宮館長時代の図書館に勤務し、漱石文庫の受入に携わるなどしていた過去があった。

この時点では、一部を三男に残し、他は東北大学に納入する方向で進んでいたようだ。実際、年明けには一部が仙台に発送された。

【資料二三】夫人昭和四二年二月二十七日付葉書（2-10）

お寒さ厳しい冬でございました。御障りもなく入らせられますか。私は暮れの三十日夜、ふみ台からふみ外して廊下に落ち、大した事ではないと思いましたがレントゲン診察の結果、肋骨骨折で一月二月二ヶ月を整形外科通いに暮してしまひました。やっと
昨今、胸のほう帯もとれ、ホットして居ります。次男と娘達とで書籍の整理をやつて居りますが、ポール箱に納めないと積み下しに困ると鉄道で申しますので、金吾が大根河岸まで車で参り、今の処四十箱ほど整理いたし、一両日中に発送いたします。漱石先生のものはまだ信託会社の倉庫に預けてあり、私の外出が出来ませんと取りに参れませんが、ずっと後になります。書籍は運賃が非常に高くなりますので、曠三とも相談いたし今度のコンテナ一箱分（四畳半一室分のよし）でやめることにいたしました。
津村秀夫氏が主人の一周忌につき、いろいろお骨折り下さつています。

二月末時点で、「二両日中」に「コンテナ一箱分」送ることが予定されていた。しかし一方で、「運賃が非常に高く」なるため、その後は別の方法を考えるような文面と

なっている。豊隆の一周忌を控え、書籍だけに構つていられない状況もあったかと思われる。なお、津村秀夫（一九〇七〜一九八五）は、東北大学を昭和六年に卒業した小宮の門下生で、朝日新聞社に入社後、映画評論家としても著名となった。

その後半年以上、この件に関する夫人の手紙は残されていない。ただ、同時期に河野與一から柴田に送られた手紙には、事態の変化と、河野の心配する様子が見てとれる。⁽¹⁶⁾ その不安の現実化したのが、次の資料である。

【資料二四】夫人同年十一月十六日付封書（2―12）

其後はたへて久しく御無沙汰を申上げて居ります。御障りもなく渡らせられ何よりと嬉しく存じ上げます。過日曠三あて御手紙頂きましたよし、電話できました。書籍の事にて其方様にまで御心配御かけ御申訳もなく存じて居ります。

（中略）

私は日々古い原稿などの整理をいたし、二三日前にも主人大学生時代の日記帳が見つかり、古い頃の俳句などもありまして、間に合えば三周忌までに句集を作り度いと昨年来集めて居ります。その中曠三一

家がこゝに引移つて参りますれば、論文の完成も

早いかと思はれます。何卒く、金谷先生の御希望にそひかね大学にも御申訳御座いませませんが、まだ子供が使用中の事、くれぐれも御ふくみ願つてよろしくお計ひ頂き度く、御わびをこめて先分は御寄附にさせて頂きます。御無沙汰のお詫びかたぐ右御願ひまで。かしこ

夫人は、「子供が使用中」という理由から、蔵書全体の譲渡を断念した。実際、曠三が論文執筆のため使つていたという。また、漱石の初版本など、身近におきたいという家族の声もあつたらしい。なお「句集」とあるのは、小宮豊隆の句を集めた『蓬里雨句集』（昭和四七年五月に完成、補遺を加え昭和五九年に再版）である。

そうした事情から夫人は、すでに送付した分は寄付したいと申し出た。しかし、結局は大学が購入することになった。

【資料二五】夫人昭和四三年十一月二十六日付葉書（2―14）

先日はわざわざ御出で頂き目録など御もち頂き、早速御手配遊して下さいましたので、厚かましい限りとは存じましたが計理士の申ますとほりの受領書な

るもの御送り下さいまして、無事税務署の方え渡して貰いました。御手数誠に恐れ入りました。今日は古川さんから御電話で、北住さんのお話の事精しく承り安心いたしました。向寒の折柄くれぐれも御いとひ遊しませ。

小宮家側の古川久と大学側の北住敏夫という、国文学研究室の先輩・後輩の間で折衝があったらしい。小宮家が受領書を受け取り、事態は決着した。小宮の蔵書の一部は、東北大学附属図書館で保存されることとなったのである。

現在、東北大学附属図書館には、約一三〇〇冊の小宮豊隆旧蔵書が保管され、通常の閲覧等の利用に加え、しばしば展示にも活用されている。当初は一般書と混配されていたが、平成一三年（二〇〇一）に別置され、現在に至っている。⁽¹⁷⁾

おわりに

小宮豊隆の活動を通じ、三つの個人文庫の形成・展開の一端を垣間見た。そこには、書籍を通じて様々な人々

の関係形成が窺えた。現代と比べると、より書籍が貴重で入手困難であった時代の出来事ではあるが、時代の違いを超えて、書籍にかけた人々の熱意が感じられるような気もする。現在、何気なく存在する文庫も、少なくとも人々が関わるドラマを経て、今に伝わっているのである。

【注】

- (1) 小宮豊隆の年譜は、福岡県立豊津高等学校錦陵同窓会編集・発行『三四郎の森』（一九八五年）所収。また妻である小宮恒子が著した『偲ぶ草』（弥生書房、一九七〇年）、『続偲ぶ草』（私家版、一九七七年）、『続々偲ぶ草』（私家版、一九八五年）からは、小宮の家族や交友などを知ることができる。小宮の著作や関連文献については、大森一彦氏の詳細なリストがある（『文献検索二〇〇七 梶井重雄・梶井幸代・小宮豊隆業績特集』金沢文圃閣、二〇〇八年）。

- (2) 柴田先生記念論文集刊行会編『柴田治三郎先生記念論文集』（同刊行会、一九七二年）に、柴田の略歴や写真を載せる。柴田文書については、東北大学史料館のホームページ参照。本稿で引用する資料は、特に断りの無い

限り柴田文書である(カッコ内は資料番号)。

(3) 年未詳十二月二十五日付葉書(1—10)。

(4) 東は、第三高等学校を経て、東京帝国大学文学部では小宮の後輩となり(哲学科宗教学専攻)、明治四二年の卒業後、神戸商業学校教諭、横浜郵便局や内務省の嘱託、法政大学予科専任教授などを経て、大正一二年に北海道帝国大学予科教授に至っている(北海道大学大学文書館山本美穂子氏のご教示による)。「東京帝国大学一覽」(明治四一年版)によると、長崎の出身である。また注1小宮一九七〇著書四四頁では、漱石『我輩は猫である』の多々良三平のモデルと伝えるが、三女の小宮里子氏の記憶では、本当のモデルは股野義郎(当時五高学生)で、股野は後に漱石に抗議し困惑させたという。河野與一の昭和一六年四月三日付葉書に、東とすれ違いになったことを記す。

(5) 当時の北海道帝国大学予科教員については、『北大百年史』部局史(一九八〇年)五二〜五七頁参照。

(6) 「東北大学附属図書館昭和二〇年洋書原簿」(同館所蔵)による。

(7) 最高値をつけた書籍がOldenbergs, Hermann. Rgveda: textkritische u. exegetische Noten. Buchl-10. Berlin, 1909-

12、それに次ぐのはBlomfield, Maurice. A Vedic cono-
rance. Cambridge, 1906。

(8) ただし身边資料等の受入は昭和二五年に下る。漱石文庫の最終的なリストは、『東北大学附属図書館研究年報』三一・三二合併号(一九九九年)、および同三三号(二〇〇〇年)の石垣久四郎作成のものを参照。

(9) 小宮の戦争に対する見方については、拙稿「小宮豊隆と戦争」『東北大学史料館紀要』四、二〇〇九年)参照。
なお「アプシードスーペー」(Abschiedssooper?)の語については鈴木道男氏より、「アプシードはドイツ語のアプシート(Abschied:別れ)。その後は、おそらくフランス語のsoupeの動詞sooperを取り入れて名詞化したSooperだと思われる。これは晩餐を表す雅語なので(ドイツ語式の発音はズーパー、英語のsupperと同根)、全体で「最後の晩餐」という意味で用いていると思われる。ただ、その場合は間にsを入れてAbschiedssooperとすべきか」とのご教示を頂いた。

(10) 東北大学史料館所蔵の『図書館記/昭和二十年一月』冒頭の一月八日条に、小宮の自筆で「総長から貴重書疎開についての相談あり。会計課長に候補地を集めてもらひ、重久(篤太郎司書官)を見にやる事にする。登米の

- 酒屋の文庫倉の件。国宝用金庫の件。」とある。なお、『東
北大学百年史』四（二〇〇三年）八九頁も参照。
- (11) 矢口進也『漱石全集物語』（青英舎、一九八五年）一四
七～八頁。
- (12) 河野與一昭和三一年六月十四日付葉書に「お変わりな
きや。豊隆先生の漱石全集小引に君の病状を描いて詳で
ある」とある。「漱石全集小引」については未詳。
- (13) 古川久については、小林責『故古川久の生涯』（一九九
四年）参照。彼が編集した『夏目漱石辞典』についてはは
注目矢口著書、一二〇頁に記事がある。
- (14) 仙台文学館展示図録『夏目漱石の精神』G. D. Annunzio,
"The Flame of Life"の解説には「一四ページ目以降ア
ンカットのまま。漱石は大正五年八月二十四日の芥川龍
之介・久米正雄宛の書簡の中で、芥川がこの本を傑作と
して話題にした際、自分はそんな本は知らない」と答えた
が、後で本箱にあったので驚いた。読んだと思うが内容
を忘れてしまったと明かしている。」と記す。古川編『夏
目漱石辞典』「ダヌンツイオ・ガブリエル」の項には、漱
石著『それから』の主人公代助や、同『彼岸過迄』の市
藏の人物形成にダヌンツイオの影響が考えられること、「漱
石蔵書中の二冊のダヌンツイオの小説への短評や、明治

四二年三月一七日の日記や同年頃の断片にもしばしば言
及している」などを記す。

- (15) 『七十七銀行百年史』（同編纂委員会編、同銀行刊、一九
七九年）口絵写真部分、注1小宮一九七〇著書一七四頁。
関係する河野書簡は以下の通り。「小宮さんの一周忌で
又ごたつてゐます。東北へ行った洋書の始末はうまく
行ったのでせうね」（二月十九日付葉書）、「小宮文庫、
古川君立会で手打になつたさうですから、五月三日には
お会ひできると思ひますが、御自愛下さい（夫人はあと
まだいろいろと揺れてゐるらしい）」（四月十八日付葉
書）、「この頃は近所に住む古川君が、漱石全集のために
毎日岩波へ来るので、昨日は会社往復の車と一緒に乗る。
今朝は別だったが、昨日小宮家へ行って遺蔵書の件を話
した由。自然そちらへ移ることになるとすれば、君を労
するわけであらう。御苦労ながらお願いします」（年末
詳八月二十二日付葉書）。
- (17) 小宮文庫の最新情報については、渡邊愛子「漱石の貸
した本（2）戒能義重差出夏目金之助宛葉書に関する覚
書・付小宮文庫の成立」（『木這子』（東北大学附属図書
館報）三三―三、二〇〇八年）参照。

【付記】本稿作成にあたり、小宮里子、脇昭子、山本美穂子の各位に貴重な情報を頂いた。また、引用文中のドイツ語について、鈴木道男教授（東北大学国際文化研究科）のご教示を得た。記して感謝申し上げます。